

政府と連合して歐洲平和の維持の爲と稱して解散し翌年オベルゲンクの紀念祭を禁じ更に翌千八百九十年には千八百四十九年羅馬共和政府カタニア民政會議の紀念祝祭を禁じ、バルサンチ、オベゲンク兩俱樂部を解き國王に奏して一宴會に於て不贖黨の演説を聽きて抗論せざりし大藏卿を免ぜしめたり。クリスビは又三國同盟の持續に力め千八百八十九年二月財政の困難を顧みず解兵の不利を論じたり。是に於て院内の右黨國中の共和黨は財政に就きて政府を攻撃し切に軍費節減を唱へしが、クリスビは國王の信任篤く軍人の心を得且選舉を左右するの力ありしを以て千八百九十年十一月の總選舉に五分の四の政府黨を得恰もギゾー内閣時代の佛蘭西と同じく伊太利亞は議院政治の形體を具し、虛名を標榜しながら國王と總理との施政を甘受したり。而もクリスビは輿論の輕んず可からざるを知り武斷王國と三國同盟は伊太利亞統一の佛蘭西と教皇とに威嚇せらるゝを防ぐ爲なり紅海遠征は伊太利亞軍の名譽なり」と稱して愛國の志士に訴へ、クリスビの名聲全國を傾く。然るに千八百九十一年一月クリスビの議院に於ける論議右黨の嫌惡に觸れて内閣外れ再びデルデニ (de Rudini) 侯の右黨内閣成立し二

月九日より左黨の一領袖ニコテラ之を助けしも幾ならずして千八百九十二年五月十五日ジヨッチ (Giolitti) 左黨内閣を組織し議院を解散し新に多數の政府黨を選舉し得たり。千八百九十三年一月羅馬銀行六千五百萬の不法手形發行の事件暴露し議員の調査委員の之を討明するや閣臣の連坐せるを發見し十一月に至りジヨッチ内閣亦辭職す。クリスビ再び内閣總理と爲る。

是より先千八百九十二年十一月クリスビはパレルモに於て選舉上院議員俸給常備軍節減を説き千八百九十三年十月ガリバルヂ紀念碑除幕式に臨みては自ら平和の使者にして戦亂の徒に非ずマッテニガリバルヂの如く國民聯合の保持者たりと宣言したりしが、一たび政府に立ちて大政を總理するに至りては共和黨社會黨と戦ひ國王を擁護し信用を恢復し負債を輕減せんを説き十二月廿日の演説には「黨争の私を捐て、院内の一致を圖る可し千八百九十年以來物質的統一を得んと力めたる吾曹は今や精神的統一を圖らざる可からず」と曰ひ、翌年五月には「吾曹をして統一の徽表たる國王に親ましめよ」と曰ひ、爾後此國の政争はノリスビと非王國黨との争と爲れり。社會黨はロムバルド、カルラ、ロマニヤ等に商業結社を組

織し、シチリア島にて農民の貧困を利用して労働組合を作りしが、千八百九十三年シチリア労働組合は亂を作したるも、政府の爲に鎮壓せられ、其一員デ・フェリチニの如きは楸に署名したる爲め、十八年間の禁獄に處せらる。斯くてクリスビは殆んど無上專制の執政と均しく、嘗て民政黨たりし左黨は、今政府の機關として專制手段を執り、新民政主義の進歩を防阻し、積年の政敵と抗争せず、教皇と通和して、加特力黨の歡心を得るに力むるに至る。共和黨の印刷公會、結社の自由、軍事節減、軍費節殺、獨佛兩國との親和を要求し、千八百九十四年十月二十二日、政府が社會黨労働組合を解散するや、共和黨は自由保護同盟を組織す。時にクリスビ議院政府黨の漸やく冷なるを看取し、千八百九十五年五月之を解散し、總撰擧を行ひ、百七十二に對する三百五十五の政府黨議員を得たり。然れども、過激黨社會黨の議院に列する者ありて、院內穩ならず、カヴルロッチ (Cavalotti) の如きはクリスビを酷評痛罵せる小冊子を公にし、國事犯者の一部分を赦るせしも、物議已まず、遂には左右兩黨提携してクリスビに反對し、右黨の領袖デルデニ侯はクリスビを罪するに印刷の自由を防阻し、社會黨を無政府黨と目し、國民の利福を奪ふものを以てせり。偶、アピシ

ニア事件の失頭あり。内外の情勢共に政府に利あらずして、千八百九十六年三月クリスビ内閣復仆れたり。

此間アルメニアの情勢は實に下の如し。シロアの主長メチリクは殆んどアピシニアを徇略して、伊太利亞の保護を甘受するに意なく、デルギシは伊太利亞軍の侵入を憤り、千八百九十三年十二月アゴルダト (Agordat) 壘を襲ひて破れ、旌旗七十二、旒死者千人を棄て、退く。偶、クリスビ再び伊太利亞總理の職を得、エリトリアの太守バラチエリ (Barthieri) 將軍其命を受けてアピシニアに入り、千八百九十四年七月、カッサラのデルギシを逐ひ、翌九十五年一月チグレ (Tigre) のラス・マンガシア (Ras Mangascia) をコアチト (Cotit)・セナフネー (Sarafah) に破りて、終にチグレを得たり。然れども、是れ實に戦役の端緒たり。ラス・マンガシアはメネリクと和し、アピシニアの全衆は十萬を超ほしに、エリトリアの兵は僅に數千に滿たず、而も伊太利亞政府は救援の法宜しきを得ず、太守バラチエリは勝に誇りて、敵に備へず。十二月七日、少佐トセリ (Toselli) は部下二千人を率て、アム・バアラジ (Amhara) に戦ひて討死す。アピシニア兵進んで、少佐ガリアノ (Galliano) をマカレー (Makaleh) 壘に圍む。將

軍バラチエリ來り救はず。壘中水盡き圍を潰やして血路を開かんとす、メチリク使を遣はして其退却を許す、ガリアノの兵乃ちマカレーを出で、伊太利亞軍とアダグラト (Adigrat) に會す。時に千八百九十六年一月二十六日なり。既にして伊太利亞の援兵至りしも、輜重の備完からず。將軍バラチエリは進退を一舉に決せんと欲し、三月一日、一萬四千の兵を率てアドワ (Adowa) 附近にアビシニア軍と戦ひ、殆んど其衆の三分の一を失ひ、ダボルミダ (Dabornida) アリモンチ (Arimondi) 及びマカレーの防禦に驍名を博したるガルリアノ等の諸將は戦没し、將アルベルトチ (Albertone) 以下三分の一は捕囚と爲る。將軍バルヂッセラ (Baldisser) 伊太利亞よりマソワに至りてバラチエリに代る。而も此アドワの敗報本國に達して、輿論政府を議するの種因となり、上に述べしが如く、クリスビ内閣は仆れたり。クリスビ内閣の仆るゝや、右黨のヂルヂニ侯代りて政府に立ち、クリスビの殖民政策を廢停し、和をアビシニアに結びてチグレを讓割し、南マレブ・ベレサムナ (Mareb-Balesa-Muna) を以て境とし、更に近年伊太利亞は蘇丹遠征の必要に依りて、カッサラ壘を英吉利に譲りたり。

クリスビ内閣の瓦解は外はアビシニア事件の爲め、内は銀行不正の爲め信用失墜したるに由る。爲に伊太利亞の内勢大だ振はざりしに、米西戦争の影響、穀價暴騰し、南方伊太利亞の貧民亂を作し、北方殊にミラノ府等響應せしが、千八百九十八年五月に至り、亂鎮まる。偶、此月よりトリノに六月間の博覽會開設せられ、民心漸く穩に喜色蒼生の面に動く。千九百年七月二十九日國王ウムベルト一世は兇徒の刃に殞れ、太子ギットリオ・エマヌエレ二世位に即き玉ふ。王は千八百六十九年十一月十一日の降誕なり。王妃ヘレナはモンテネグロ公ニコラスの女にて、千八百七十三年一月宮に入り給へり。而してクリスビも一昨年八月を以て黄泉の客となりぬ。茲に王國最近國勢の一斑を叙して、此章の結尾と爲し、別に近世文學美術の一章を加へて、本史を終らむ。

千九百年十二月三十一日の調査によれば、伊太利亞王國の人口は三千二百四萬五千四百四人、版圖面積は拾有壹萬六百四十六方哩、即ち一平方哩毎に二百八十九口強に當り、之を千八百四十八年の所在に比すれば、殆んど倍加すと謂ふ可し。從て諸市府の戸口月に増し日に加はり、都城羅馬府は千八百七十一年には僅に二十

四萬五千口たりしに千八百九十九年末には五十一萬二千餘口の多きに達し、市區の宏壯街衢の擴大亦三十年前の比に非ず。然るに獨り奇觀たるは羅馬教皇が猶ワチカノ大宮殿に在り、王國の治外に立ちて王室と對立せるをなり。

國王は千五百萬リレの歳費を得させられ行政權を掌握し玉以、内閣大臣責任を以て之を執行し、立法權は國王議會の協賛に成る。議會は上下兩院制にて、上院は四百員以内にして、丁年以上の皇族及び四十歳以上の高官、學問功勞ある者三千リ以上、以上の納稅者より撰任せる無定員の敕撰議員を以て組織し、下院議員は三十歳以上、五百八員にて、選舉資格は二十一歳以上にして、普通教育を受けし者若くは直稅十九リラ八分以上を納むるを要し、大臣、次官、高等官、士官の外、官吏、僧侶は議員たるを得ず、上下院ともに議員に俸給手當なし。内閣は總理の下に内務、外務、司法、宗務、大藏、國庫、海軍、陸軍、文部、工部、農商務、遞信の十一省より成る。財政は直稅に地租、家屋稅、流動資本及勞力より生ずる收入の所得稅に、間稅、入府稅、製造稅、鹽煙草類專賣稅及び當籤稅等ありて、千九百年度の歳出入は十七億千四百二萬七千三百七十七リラ、歳出は十七億三千二十萬八千八百七十七リラ、此不足千六百十八萬千五百五十三

リラ、千八百九十九年六月三十日の會計年度に於ける國有財産の總額は四十六億五千五百九十萬五千リラなり。陸軍は滿二十歳の國民徵兵と爲り、唯高等教育を受けし者千二百リラの納稅者は一年、他は二三年間服役の義務ありて、四十歳までを後備と爲す。千八百九十九年六月調査の陸軍力は、常備將校一萬三千九百十八人、兵士二十六萬八千五百人、後備將校一萬一千五百四人、兵士八十八萬七千三百四十五人、國民軍將校一萬四百八十七人、兵士二百一十一萬六千七百二十人、總計三百廿七萬二千七百人、奈破崙一世嘗て曰へるとあり、伊太利亞存立の第一要義は自ら能く海峽を防備するの大海軍力を備ふるに在り。輒近伊太利亞の海軍大に進歩し、千九百一年に於て製造中のものを合算して、其戰艦力は、一等戰艦四、二等戰艦三、甲裝巡洋艦九、三等戰艦四、防護巡洋艦十四、水雷砲艦十七、破壞艦九、一等水雷艇十一、二等水雷艇百一、三等水雷艇七十一、海底水雷艇一將、校千五百四十六、下士、水兵砲手、機關手の屬二萬三千六百二十九、合計二萬五千七百七十五人あり。次に内、外交通機關の發達また大に見る可きありて、帆船、汽船の類總べて六千四百四十八隻、八十一萬五千六百六十二噸、鐵道の延長は千八百九十八年にありて三千九百九十里、餘郵便局

及函數七千七百九、電信線路一萬六千六百六十一里、線長四萬四千四百九十一里。斯くて内地の商工、農業年を追ふて進歩し、千八百九十五年に於て輸入の超過價額は一億五千萬リヲたりしもの漸次減じて千八百九十九年には僅に六千九百萬リラの差と爲り、輸出主要品は絹、葡萄酒、橄欖葉實、卵、硫黃、穀類、石炭、鐵類なり。教育は初等、中等の普通教育、中等の専門教育、高等教育を授くる四種の學校ありて、北方の教化は大に進歩せるも、南するに従て教養なき者太だ多く、千八百九十五年南北を平均して不文の徒は百分の三十八、學校の總數は六萬八千九百四、生徒學生總數は三百二十一萬五千八百八十三、中に就きて大學はトリノ、羅馬、ボロニヤ、ゼノワ等の諸官立、パデュー、パレルモ、バルマ等の無月謝大學を通じて、千八百九十八年に於て二十一校、教授九百六十二、學生二萬二千五百四十。圖書館は千八百三十一箇所。定期刊行物は千八百九十五年末調査に據れば千九百一種。書籍公刊の多少は千八百九十年に於て九千八百五十五種。

伊太利亞王國は上の如き現勢を有すと雖も、都城羅馬府中になほ教皇の屈せざるあるを奇觀とす可し。教皇所屬の管轄地は大僧正管轄地四十九、僧正管轄地二

百二十及び監督僧正管轄地六あり。而も是千百年來歐洲に大威權を奮ひ、諸強の帝王を膝下に屈せしめし教權赫々たる羅馬教宗の餘脈と爲さば、太く怪しむに足らず。而も伊太利亞王國の中央には猶僅に一萬口に足らざる獨立共和國の存在するありて、サンマリノの名は歐洲最舊の國として殘存せる亦一奇なり。其大議會は六十人、小議會は十二人の議員より成り、將校三十八、兵士九百五十人の陸軍を有し、千八百九十七年六月伊太利亞と同盟を締結せり。

奈破崙一世嘗て曰く、伊太利亞にして若しモンテ、エリノを境とし、以南イオニア海に至る諸地シチリア島を合せて、サルデニア、コルシカ、ゼノワ、ツスカナの間に在らしめば、風習利害相一致して統一の業掌を反すが如けん」と。洵や半島が千百年の間南北風を殊にし、利害相關せず、輓近に至りて僅に統一王國の實を見るに至りしものは假令若干の事由ありとするも、天然の障防大に與りて力あるを拒む能はず。然も之れを他の一面より論ずれば、諸市府の發達、伊太利亞の如きは稀有にして、其文學美術の精華を競ひたるが如きは、必ず地方競争の甚激なりしに由らずんばならず。今や幸にして南北融和して一王の治を見る。地方各其長を用ひば、國運の

昌隆期して指す可く三色の旗地中海頭に纏りて歐南の風氣に乗ずるを得ん哉。

第拾七章 近世の文學美術

(十七世紀以後最近)

「六百」時代の文藝美術。十八世紀の弊風。十九世紀文藝美術復興の熱運。モンナとフオスコロ、ボツタ。美術界の古蹟。新風の興起。マンツォニとレオバルナ。文學界の政熱。歴史的研究。南方樂部の盛。繪畫と彫刻と。十九世紀後半の新進時代。カルツツチ。歴史家。考古學。史學會。三新聞の鼎立。記録と自傳。最近の詩人。小説。戯曲。最近の美術界。音樂。エルフ。百科の學者。

十六世紀末に於ける伊太利亞風尚の衰頹は十七世紀に入りて益々太しくして回復するに由なく「六百」(Seicento)の語は鋪張誇大にして思索虛無なる文學を嘲る諷と爲りたり。是れ耶蘇會徒の教育を蹂躪し、ピウス五世教皇の宗教裁判を起して思索の自由を束縛せしに因ると雖も、西班牙が半島を羈扼せしと最も重大の因由たらずんばならず。從て千五百四年以來西班牙の一州藩と化せしナポリに

於て此弊最も太しく詩人マリーニ (Marini) 千五百六十九年生千六百二十五年歿の如き稀有の天才を懷きしも其伊太利亞文學を腐敗せしめたるも亦尠からず。時に畫界にはミカエル・アンゼロー・ダ・カラワツシ (Michael Angelo da Caravaggio) 千五百六十九年生千六百九年歿彫刻家にはジヴ・ニコレン・ベルニニ (Giovanni Lorenzo Bernini) 千五百九十八年生千六百八十年歿建築にはボッロミニ (Borromini) 千六百六十七年歿等ありしも美術界の頽勢亦文學界に同じ。然りと雖も半島中猶獨立の體面を維持し國民の元氣を保存せる地方に至りては稍見る可きものなきにあらず。ピサのガリレオ・ガリレイ (Galileo Galilei) 千五百六十五年生千六百四十一年歿の如き深刻なる觀察幽遠なる思索を以て流麗の筆を執り宗教裁判の爲に斃れしも名を史上に留め『ツスカニアのバッカス』頌を作りしフランチェスコ・ロンヂ (Raimi) 千六百二十六年生千六百九十七年歿の如きまたガリレオに譲らず。此二人に亞ぎてガブリロ・キアブレラ (Gabriello Chiabrera) 千五百五十二年生千六百三十八年歿、フル・ネチヌチ (Fulvio Testi) 千五百九十三年生千六百四十六年歿、井ンチエンツォ・フィリカイア (Vincenzo Filicaja) 千六百四十二年生千七百七年歿、アレッサンド・ログイヂ (Aless.)

Guidi) 千六百五十年生千七百十七年歿等は多少の瑕瑾を免れずと雖も當世有數の叙情詩家にて、バオロ・サルビ (P. Sardi) 千五百五十二年生千六百二十二年歿、君牧師スフォルツ・バルラギチノ (千六百七年生千六百六十七年歿) は共にトレント會議の歴史を著はして名を文學史上に留めたり。

十八世紀の前半に至りてはピエトロ・ジャンネチ (P. Giannone) 千六百七十六年生千七百四十八年歿の『ナポリ史』、モテナのルド・井コアントニニ・ムラトリ (L. A. Muratori) 千六百七十二年生千七百五十年歿の『伊太利亞紀年史』、スキピオ・パンネイ (Scipione Maffei) 千六百七十五年生千七百五十五年歿の『エロナイルストラタ』 (Verona Illustrata) 等數部の史籍世に出でしも皆文辭の賞揚すべきなし。其中葉に及びては佛蘭西文學の惡風に感染して爲に半島の言語文章を害ふと多かりしも、尙羅馬のピエトロ・メタスタシオ (P. Metastasio) 千六百九十八年生千七百八十二年歿の劇曲、エネチアのカルロ・ゴルドニ (Carlo Goldoni) 千七百七年生千七百九十三年歿の喜劇、エネチアのガスパロ・ゴツチ (Gasparo Gozzi) 千七百十三年生千七百八十六年歿、伯カルロ・ゴツチ (千七百二十二年生千八百六年歿) 兄弟シニセッペ・パリーニ (千七百二十九年

生千七百九十九年歿の諸戯曲、ポットリョ、アルフィエリ(千七百四十九年生、千八百三年歿)の悲劇、ギンツェンツォ・モンチ(千七百五十四年生、千八百廿八年歿)の詩賦等は最近文學の曙光を發したりと謂ふ可し。蓋し十九世紀に於ける伊太利亞興隆の運は獨り政治的復興にあらざりて、文學美術亦趨勢を同らし、民心の激成奮作、政治文學相表裏して勃興せり。パリニは十八世紀末を以て逝き、アルフィエリは新世紀の始に亡びしも、モンチの名は十九世紀伊太利亞文學の劈頭に輝けり。モンチは奈破帝時代の風尚たる古調派詩家の泰斗にして、欽定詩宗と爲り、奈破帝皇帝の戴冠、戰役結婚、羅馬王の降誕を頌せり。其諸作は詩的思想乏しからずと雖も、専ら格調を重んじ、流麗絶倫なるも、惜かな感興に於て缺くる所あり、動もすれば當時の急激なる風潮の變化に晚るゝの憾あり。ユゴ・フスコロ(Ugo Foscolo、千七百七十八年生、千八百二十七年歿)に至りて、大にモンチと異なり、想富詞豊、賦詠縱横、滌々鏘々の聲、聞く者をして肉躍り血湧かしむ。フスコロはツァンテの産、埃兵のミラノに歸るや、先づ瑞西に通れ、次で千八百十六年英吉利に走り、流寓十年餘、遂にターン・ハム・グリーンに客死す。モンチの詩界に於ける如く、散文界に古調を守りて『伊太利亞のリギウス

と稱せられし當時の大家は、ビエモンテのジュゼッペ・カナルロ・ボッタ(千七百六十六年生、千八百三十七年巴里に歿す)なり。美術に於ても、當時古風盛に、エチチアのアントニオ・カノヴァ(Antonio Canova、千七百五十七年生、千八百廿二年歿)は彫刻の宗、皇室繪師としてミラノ宮、モンツの離宮に名筆を揮ひし、アンドレア・ペッパニ(A. Appiani、千七百五十四年生、千八百十七年歿)は丹青の巨擘たり。然れども以上は皆北伊太利亞の名手、南方の異材を求むれば、『私婚』(Il Matrimonio Segreto)の作者ドメニコ・チアロサ(Domenico Cimarosa、千七百五十四年生、千八百一年歿)、『セネリアの劇工』(Il Banchiere di Siviglia)の作者ジョヴァンニ・バインメンロ(Giovanni Paisiello、千七百四十一年生、千八百十六年歿)等を始めとし、幾干の樂曲作者あり。

然るにフスコロ逝き、モンチ病むに至り、アレザンドロ・マンツォニ(Alessandro Manzoni、千七百八十五年生、千八百七十三年歿)の著、『許婚の夫』(Il Promessi Sposi)公にせられ、新機運初めて動く。マンツォニは夙に『聖頌』(Inni Sacri)、『五青年』(Il Cinque Maggio)の諸作ありて、其名既に世に知られたりと雖も、此作其の最傑作たり、蓋し著者は伊太利亞に於て自由主義と同義なる新ロマンチズムの驍將にして、自由正義を愛

し、社會の卑賤者に同情を表したれども、決して過激なる咒咀を爲さず、純然たる加
 特力教徒にて、常に遜讓の美を説けり。然るに之と世を同うし名を等うせしジッ
 モ・レオバルデ (Giacomo Leopardi) 千七百九十八年生千八百卅七年歿に至りては大に
 異なり。マンツォニの生涯は多く平和靜穩にして、理會想像の均衡を失はざりしも、
 レオバルデはレカナチ (Recanati) の小市に籠居して、深大の感興抑へ難く、身體羸弱、
 情緒敏激、世間一切を悲觀し、神人兩界の信仰を蔑如し、其作最も激越昂奮を極む。
 故にマンツォニは從ひ學ぶ者多く中に就きてトマンゾマン (Tommaso Grossi) 千七百
 九十一年生千八百五十二年歿、シヨヴァニン・ベネト (Giovanni Berchet) 千七百八十三年
 生千八百五十一年歿、マッシモ・ダゼリ (Massimo D'Azeglio) 千七百九十八年生千八百
 六十六年歿、其名世に轟かし「我囚」(Lemie Prigionieri) の著者シルヴィオ・ピ
 ゼロ (Silvio Pi
 ccolo) 千七百八十八年生千八百五十四年歿、英吉利に逃亡して幾多の小説を作り
 しシヨヴァニン・ベネト (Gio. Buffin) 千八百七十年生千八百八十一年歿及び其傳記より
 は寧ろ其歴史殊に「世界史」を以て名を知られたるチサレ・カンツ (Osare Cantù) 千八
 百四年生千八百九十五年歿等の名家多しと雖も、レオバルデに至りては多く世に知

られり。

ロムバルド・ピエモンテのマンツォニの一派、斯く穩健の調あるに反し、激越なる革命
 の氣焔を吐きしはツスカナの文士なり。フランチェスコ・ド・メニコ・ゲエラツィ (F. D.
 Guerrazzi) 千八百四年生千八百七十三年歿はピサに於て英吉利詩客バイロンと相
 知り、之に私淑して、其作「ベネントの戦」(La Battaglia Di Beneneto)、「フイレンツの圍
 (L'Assedio Di Firenze) 等大に青年の氣を鼓舞煽搖し、其同郷のシヨヴァン・バッチスタ・ニコリ
 ニ (Giovanni Niccolini) 千七百八十二年生千八百六十一年歿亦大に外隣の專横
 に憤りて少く伊太利亞敵愾の心を激成せり。而もツスカナの方語は寧ろ諧謔諷刺
 に適せし故、シッポ・ヘ・シッスチ (Giuseppe Gioanni) 千八百九年生千八百五十年歿の政治的
 諷刺最も巧を極めたり。當時の伊太利亞文學は一として政治的關係あらざるは
 莫く、南方伊太利亞の愛國詩人にガブリエ・ロゼチ (Gabriele Rossetti) 千七百八十三年
 年生千八百五十四年歿、アレクサンドロ・ボエリオ (千八百二年生千八百四十八年歿) な
 り、ゼノアの青年に「國民曲」(Canto nazionale) の作者ゴッフレド・マメリ (Goffredo Mameli)
 千八百廿八年生千八百四十九年歿あり。エネチアの詩客にはフランチェスコ・ダル

ロンガロ (Edall' Ongaro) 千八百八年生、千八百七十三年歿、アレアルドアレアルヂ (Aldo Alardi) 千八百十二年生、千八百七十八年歿、ジッペンニブラチ (Giovanni Prati) 千八百十五年生、千八百八十四年歿あり。又詩人にして哲學者を兼ねたる者はニコロトマセオ (Nicolo Tommaseo) 千八百二年生、千八百七十四年歿あり。哲學者中の錚々たる者は夫のギンチェンツォヂェルチ之に亞ぐ者はアントニニコスミニ (A. Rosmini) 千七百九十七年生、千八百五十五年歿、此二人の學說を折衷兼説し、而も思索よりは文辭を以て世に聞えたるはラレンヂ・マミアニ (Terenzio Mamiani) 千七百九十九年生、千八百八十五年歿なり。

歴史的研究亦復興し、ビエモンテに在りては、ヂェサレ・バルボ千七百八十九年生、千八百五十三年歿、ジッセルマンノ千七百八十六年生、千八百六十七年歿之を始め、ルイジ・チンツァリ (Luigi Chiaro) 千八百二年生、千八百七十年歿、エルコレ・リコチ (Erole Rioffi) 千八百十六年生、千八百八十三年歿之を繼ぎ、ロムバルドにては、ジッセルマンラッ (Giuseppe Ferrari) 千八百十一年生、千八百七十六年歿、伊太利亞革命の研究を遂げて、史的事實の循環説を唱へ、ヂェサレ・カンツ (千八百四年生、千八百九十五年歿) は史

的智識の普及に全力を盡くし、エネチアにてはエマヌエーレ・チコニヤ (Emanuele Cicognani) 千七百八十九年生、千八百六十八年歿、エウジニョ・アルベリ (Eugenio Alferi) 千八百十七年生、千八百七十八年歿等は批評を爲し、ナポリの逐客ピエトロ・コロンタ將軍千七百七十五年生、千八百三十一年歿は「ナポリ王國史」(Storia Del Regno Di Napoli) を編み、ヂノ・カッポニ (Gino Capponi) 千七百九十二年生、千八百七十六年歿は伊太利亞史記録所に奉職し、アントニョ・マッチ (Atto Vannucci) 千八百十年生、千八百十三年歿は力を「伊太利亞古代史」(Storia dell' Italia Antica) に用ひたり。然れども羅馬には諸道の學廢絶し、ナポリ王國亦文學の見る可きなきも、尙此間に史家カルロ・トローヤ (C. Troya) 千七百八十四年生、千八百五十八年歿、哲學者バスクア・レガルビ (Pasquale Galluppi) 千七百七十年生、千八百四十六年歿を得可く、シチリア島には「晚曆史譚」(Storia del Vespro) の著者ミケレ・アマリ (Michele Amari) 千八百六年生、千八百八十九年歿あり。

抑南方伊太利亞の文學は之を北方に比して殆んど論ずるに足らずと雖も、其長とするところ樂部に在り。樂曲作者の優なる者數輩を抜かんに、ノルマ (Norma) ノンナムブラ (Sonnambula) イソリタニ (I Puritani) 諸篇を残し、青春三十三歳を一期と

して黄土に委したるギンチェンツォ・ベルリニ (Vincenzo Bellini) 千八百二年生千八百三十五年歿を始とし、サエリ・ロメルカダメンタ (Saverio Meradante) 千七百九十七年生千八百七十年歿、シリヌビノ・ヒラ・コマン (Crispino El Comare) の作者リッチ (Ricci) 兄弟、エンリコ・ポトルラ (Enrico Petrella) シムオン・パチニ (Giovanni Pacini) 千七百九十六年生千八百六十七年歿等あり。ハッロのシマキ・ロッシニ (Gioachino Rossini) 千七百九十二年生千八百六十八年歿は千八百十六年十三日にして『シギリアの刺工』を作り、後『セミラミデ』(Semiramide) 『シリエンモラン』(Giuglielmo Tell) を作る。シチリアにベルリニあり、中央伊太利亞に此ロッシニあるに當り、北方伊太利亞に『ルチア・ヂ・ラムメルモール』(Lucia di Lammermoor) 『ホリット』(Polino) 『ファボリア』(Favorita) 諸曲の作者ガエタノ・ドニチニチ (Gaetano Donizetti) 千七百九十八年生千八百四十八年歿あり。蓋十九世紀前半の伊太利亞の如く奎運の盛に、文豪の多きは諸國史上稀に見るところ是を以て半島は復歐洲諸強の間に位して慚色なきが如し。獨り繪畫彫刻に於てはカノワに比す可き天才を出ださず、たゞロレンゾ・バルトリニ (Lorenzo Bartolini) 千七百七十六年生千八百五十年歿の神刀、ランテス・コ・ハエツ (En-

nesco Hayez) 千七百九十一年生千八百八十一年歿の妙筆あるのみ。カルロ・ロメケチ (Carlo Marochetti) 千八百五年生千八百六十八年歿の彫刻亦稱賞の値あるも、此人は多く英佛兩國に在りて名聲を博し、伊太利亞に得る所甚だ密ならず。

然るに千八百六十一年伊太利亞王國統一の宣言出で、より文學美術新進の域に達せり。ロマンチズムの驍將なは地歩を保つと雖も新趨勢は夙く起れり。シムスニ・カルツッチイ (Giosuè Carducci) は千八百三十六年にワルヂカヌラロ (Vaticastello) に生れ、此時尙二十餘歳の青年なるも非ロマンチズム、非マンツォニ流を唱道し、初は復古派の恢復を以て任じ、フスコロアルフィエリの口碑を襲踏せしが、幾ならずして復古派の名の下に純然たる新時代思想を描寫し、其作『サタン頌』(Innoa Satana) (千八百六十五年作) は盛に自由進歩を標彰せり。然れどもカルツッチイは獨り此種の詩賦に名を博せしのみならず、兼て剛壯典雅の文を善くし、巧に嵩高雄大の調と細心巧緻の趣を綜綴するの妙を得たり。次に評論歴史に至りても、またルジッポ・ボンギ (Ruggiero Bonghi) 千八百二十八年生千八百九十五年歿あり、バスクアレ・ガレルリ (Pasquale Villari) 千八百二十七年生ナポリの人あり。バスクアレ・ガレルリは過去の

史實を再現して能くサチナロジマキアエリ時代のフィレンゼを現下に描出する史筆を有し、且思索精細善く當世の時事を上下し、或は將來の趨勢を論ず。若し夫れツルロ・イ・サラニ (Tullio Massarani、千八百廿六年生の「ロメニ・ペンサワイル・ドットル・ロンニ」(Come La Pensava Il Dottor Lorenzi) に至りては著者の八面玲瓏美術詩科學を兼通して愛國の志士たるを表して餘あり。マッサラニと相並びて國民文化の上に功績ありしは伊太利亞有數の出版者たると共に、又た「トラヴェッチネの不幸」(Miserie del Signor Travetti) 『石輪の泡』(La Bolla di Sapone) 等の喜劇『地の神使』(Gli Angeli della Terra) 『百姓』(La Plebe) 等の小説『サトリオ・エマヌエーノ王國』(Il Regno di Vittorio Emanuele) 八卷の歴史の著者キットリオ・オベルセチ (V. Persazio、千八百三十年生) あり。此他エネデクト派の僧ルイジトスチ (L. Ego、千八百十一年生、千八百九十七年歿) 伊太利亞海軍の事を記述したるドミニコ派の僧アルベルト・グリエルモッチ (A. Guglielmo) 千八百十二年生、千八百九十三年歿、現代史に筆を著けし二愛國者ルイジ・カル・ロ・マリニ (L. C. Farini、千八百十二年生、千八百六十六年歿) シュセッペ・ラ・ファリナ (G. La Farina、千八百十五年生、千八百六十三年歿) カルロ五世時代の歴史に熱心なるシュ

セッペ・デ・レヴァ (G. de Leva、千八百二十一年生、千八百九十五年歿) シュセッペ・マッサリ (G. Massari、千八百二十一年生、千八百八十四年歿) ニコメデ・ビアンキ (Nicomede Bianchi、千八百十八年生、千八百八十六年歿) フエルデナンド・ラナリ (F. Ranalli、千八百十三年生、千八百九十四年歿) シュセッペ・グエルツニ (G. Guerzoni、千八百三十五年生、千八百八十六年歿) 等皆史家として數ふ可し。更に生存者中に之を求めんには、カプア大僧正アルマンゾ・カペチエラト (A. Capocciaturo、千八百二十四年生) 議員ドメニコ・カルチ (Domenico Carutti、千八百二十一年生) ボロニヤ大學教授フランチェスコ・ベルトリニ (Fran. Bertolini、千八百三十六年生) のカヅール伯爵簡を編輯し、伊太利亞回天の記を草したるルイジ・キアラ (L. Chiara、千八百三十四年生) 少伊太利亞の歴史を編纂せしシムズ・ニ・マンズ・カ (Gio. Faldella、千八百四十六年生) 等なり。ロムアルド・ポン・ヂニ (Romualdo Bonfadini、千八百三十一年生、千八百九十九年歿) ボムベ・オ・モルメンチ (Pompeo Molmenti、千八百五十二年生のミラノ、エチチア附近の研究に従事し、アウグスト・フランケチ (Augusto Franchetti) ランガ・マ・ロ・シ・ソ・ニョリ (Raffaello Giovagnoli) シュセッペ・イン・シニメ (Giu de Biasis) ピオ・カルロ・ファレチ (Pio Carlo Falletti) カル・ロ・チ

ボッラ (C. Cipolla)・アメデオ・トリニバルチ (Amedeo Crivellucci)・オンスネート・マンニ (Orsilio Tommasini) 等亦史界に盡力せり。學界の趨勢斯の如くにして精細なる研鑽は古代に溯り、考古學にシモン・パチスタ・デ・ロッシ (Giovanni Battista de' Rossi) (千八百二十二年生千八百九十四年歿)・アリオダンテ・マンレンチ (Ariodante Fabretti) (千八百十六年生千八百九十四年歿)・ジュゼッペ・フ・オレリ (Giuseppe Orioli) (千八百二十三年生千八百九十六年歿)の諸故人及びドメニコ・コムパレッチ・エットレ・バイス等の名家實に尠からず。全國に到る處に史學會を設立し、文書を採集し、雜誌評論を公刊し、千八百八十三年羅馬府に先づ伊太利亞史學會興り、愛國の志篤く、文才優秀なるチネザレ・コレンチ (Cesare Correnti) (千八百十五年生千八百八十八年歿) 初め、會頭となり、文學評論に著名なるマルコ・タバリーニ (Marco Tabarini) (千八百十八年生千八百九十八年歿) 其後を繼承し、バスクアレ・ネラリはタバल्लीニに代りて會頭と爲る。歴史、哲學、政治に兼通せるドメニコ・ベルチ (Domenico Periti) (千八百二十年生千八百九十七年歿) 國民教育に熱心なるアリスチデ・ガベルリ (Aristide Gabelli) (千八百三十年生千八百九十一年歿) 等皆有數の學者たり。

伊太利亞人文の盛此の如く、其進歩開展の速なる寧ろ驚く可きものあり。従て最も社會に甚深甚密の關係を有する新聞雜誌、文學亦輕視す可くもあらず。所謂『回天時代』に在りてはアントニオ・ガレンガ等數輩の名士ありしが、千八百七十年來は、『國民新聞』(Gazzetta del Popolo)の編輯シモン・パチスタ・ボッテロ (Giovanni Battista Bottero)は非僧徒、非宗教主義にて、ポットリオ・エマヌエレ王、カザール・ガルルバチをして伊太利亞統一の大業を立てしめし、勤王愛國の鼓吹者『論說』(Opinione)の編輯ジ・コモ・デ・ナ (Giacomo Dina)はカヴァール伯の薨後廟堂の大政を總攬せし右黨の代表者、『統一加特カ』(Unita Cattolica)の編輯ドン・マルコチ (Don Margotti)は教皇の擁護者にして、互に下らず、鼎立の勢を成し、論難筆戰、太だ熾なり。最近に至りても、文藝の士、論辯の徒、新聞事業に従ふ者、枚舉に遑わらず。又統一時代の多事なるに當りては、苟くも筆を執るもの記録、自傳を叙述せざるは稀にして、中に就き、モロツツ・テラ・ロッカ (Morozzo della Rocca)の『自傳』(Autobiografia)・マッシモ・ダゼリヨの『記錄』(Ricordi)・ルイジ・セッテム・ブリニの『吾生涯記事』(Ricordanze della mia Vita) (千八百十三年乃至千八百七十六年等)は華實兼備の好著述と稱す可し。評論界の雄將には古派に博識果斷のフランチ

スコデ・サンクチス (Francesco de Sanctis) 千八百十八年生、千八百八十八年歿あり、新派にアドルフ・バルトリ (Adolfo Bartoli) 千八百三十五年生、千八百九十四年歿あり。バルトリの『伊太利亞文學史』(Storia della Letteratura Italiana) 八卷は上世よりペトラルカに至る間の文學を論述す。此外學者論評を善くする者太だ多く、大抵皆新舊兩派の長所を合せ得んと力む、トリノ大學教授アルツォグラフ (Arturo Graf) 千八百四十八年生の如き其の一なり。學者にして詩家を兼ねたるはカルツチ及其一派あり、カルツチと反抗せし者にシチリアの大詩人マリオリビサルヂ (Mario Rapisardi) 千八百四十四年生ありて、『明星』(L'incifer)、『ギョベ』(Giobbe) 二名篇を作り、又多く羅典、英吉利の詩篇を翻譯して流麗を極めたり。此他青春にて中折せし詩家にはエミリオ・ブラガ (Emilio Praga)、『イヂニエ』(E. Nicoletti) 現存の諸家にはエンリコ・パンツァッキ (Enrico Panzachi) 千八百四十一年生の流暢にして適勁を失はざるを始とし、『伊太利亞評論』(Rivista d'Italia) の編輯ドメニコ・ロリ (Domenico Gnoli) 千八百三十六年生、ジエゼ・バウレリ、オロスタンツァ (G.A. Costanzo) 千八百四十三年生、アルフレド・バンチニョリ (A. Baccelli) 千八百六十三年生、近時初めて詩壇に表はれし年少詩人

ジッピンニチナ (Gaio Cesa) あり。女詩人には有名なるジャンニナ・ミヤリ (Giannine Milli) 、『リンダ・ボナチナルナ・モンチ』(Alinda Bonucci-Brunamonti)、『アダ・ネグリ』(Ada Negri) 等あり。

次に小説劇曲に就いて略述せん。最近伊太利亞文學者中最も興望を負へるはエドモンド・デ・アマチス (Edmondo de Amicis) なり。アマチスは始め軍人なりしが、其頃既に『ボチエチ・デラ・サ・ミリタレ』(Bozzetti della Vita Militare) の著あり、後職を辭して専ら文學に身を委ね、西班牙、モロッコ、荷蘭倫敦、巴里、コンスタンチノポリス、南亞米利加諸方を旅行して材料を蒐輯し、『クオレ』(Cuore) を著はし、近時又『イル・ロマンツァ・ヂ・ウン・マエステロ』(Il Romanzo di Un Maestro)、『ナ・カ・ロマンツァ・ヂ・チ』(La Carrozza di Tutti) の著あり。アントニオ・ニョングァンロ (Antonio Fogazzaro) 千八百四十二年生の三小説『マロムブラ』(Malombra)、『ダニエ・コルチス』(Daniela Cortis)、『マロ・モンド・アンチコロ』(Mio solo Mondo Antico) は著者が高尚なる道念の經路歴々證す可し。アマチス、フガツァロはともにマンツァニの門下に出でたり。ゾラ一流の寫實小説の作者にはジッブニエルガ (Giovanni Verga) 千八百四十年生、ルイシ・カナアナ (Luigi Capuana) 千八百三十九

年生、其女流にマチルダ・セラオ (Matilde Serao) 千八百五十六年生、ベアトリツ・スベラン (Beatrice Sprenz) アンナ・ラヂウ・ス・マツ (Anna Radius Zaccari) 等数輩あり。エルの作は『悪業』(L'Inferno) 『マハラヴィガ』(Mahavoglia) 『イ・マ・ト・ロ・レ・ン・ギ・ス・ア・ノ・ド』(Mastro don Gesualdo) 細緻を以て稱せられ、カプアナには『風信子』(Giacinta) 及び御伽譚を以て世に知らる。健全なる家庭小説の作者にはサルワトル・マリナ (Salvatore Maria) 千八百四十六年生、アントン・ジュリオ・パトリリ (Anton Giulio Barrili) 千八百三十六年生、エンリコ・カステル・マオチ (Enrico Castellano) 千八百三十九年生、ベロラ・モ・ロ・マタ (Gerolamo Rovetta) 千八百五十年生あり。而して毀譽褒貶を一身に負ひ、或は異常の天才と賞せられ、或は嘲罵の府となるはガブリエレ・ダマンチ (Gabriele D'Annunzio) 千八百六十二年生にして、其小説は佛蘭西のブルゼーの如く、其主張の我執はニーチェの先人主義に近し。

伊太利亞の劇場は十九世紀中最もパオロ・ジ・ア・ロメッチ (Paolo Giacometti) 千八百七十年生、千八百八十二年歿の作に成りし戯曲を多しとす、其今尙行はるゝものには『罪と仇討』(La Colpa Vendica) 『モルテ・チ・ギレ』(Morte Civile) 等数曲の喜劇あり。

り、優人の秀でたる者は男優にエレオノラ・ジゼ (Eleonora Duse) エルメテ・ノ・エトリ (Ermete Novelli) エルメテ・ツ・ニコニ (Ermete Zacconi) クラウヂオ・レイゲブ (Ciriillo Leighet) 女優にアデライデ・リストリ (Adelaide Ristori) カプラニ・カデル・グリッロ (Capranica del Grillo) 千八百十六年生あり。ジ・コメッチの後伊太利亞作者の首位を占めしはパオロ・フェラリ (P. Ferrari) 千八百廿二年生、千八百八十九年歿にして、其名作ともいふ可きは『ゴルヂニ・エ・レ・ス・エ・セ・ヂ・コ・メ・ヂ・エ』(Goldini E Le Sue Sedici Commedie) 『マ・サチラ・エ・パリニ』(La Satira E Parini) 等の歴史的喜劇なり。蓋し史劇にて有望なるはビエトロ・コッサ (P. Cossa) 千八百三十四年生、千八百八十一年歿なりしも、不幸齡四旬に満たずして中折す。フェリチ・カヴァロッチ (Felice Cavallotti) 千八百五十二年生、千八百九十七年歿は、エチチア土語を以て世話物を作り、また名を世に顯はせり。更に近時の作者中にて頭角を抜く者は『バルチタ・ア・サッキ』(Purtita A Saacchi) 『愛の捷利』(Trionfo d'Amore) を作りてより喜劇史劇の作者として漸次名を揚げ來りしジ・セツ・シ・ア・ロ・サ (Gin. Giocosa) 千八百四十七年生を始とし、アキレン・ト・レ・リ (Achille Torelli

千八百四十四年生、ロベルト・ブラッコ (Roberto Bracco)・千八百六十一年生、マルコ・ブラガ (M. Braga)・千八百六十三年生等なり。近年公使として、エリトリア太守として政界に名高きフランチェスコ・デ・レンチス (Fede Renzis)・千八百三十六年生男、フェルデナンド・マルチニ (Ferdinando Martini)・千八百四十一年生等又劇曲に筆を染めしことあり。

最近世文運の勃興するに遭遇して伊太利亞の美術復興あり。蓋し其美術始はロマンチズムに屬せしもドメニコ・インヅノ・ジロラモ・インヅノ (Induno) 兄弟出で始めて自然を描き、社會を寫し、ナポリのフィリッポ・パizzi (Filippo Palizzi) は動物の寫生を創め、ツスカニアに新派の巨壁ジブニ・ニヅブレ (Giovanni Dupre) 出で、チノには當代彫刻の大家ポンチンゼラ (V. Vela) 千八百二十二年生、千八百九十一年歿、生れて最近半世紀間伊太利亞の彫刻界を風靡す。然るにナポリのドメニコ・モレリ (Domenico Meili)・千八百二十六年生、丹青界に大革命を起すとともに、ピエモンテのジュリオ・モンテマルダ (G. Monteverde) 千八百三十七年生は彫刻界に一新紀元を創せり。バスクアレ・ギラルリは其著『近世伊佛の繪畫』(La Pittura Moderna in Italia ed in

Francia) 中、モレリの繪畫が最も重きを光の明暗に置けるを論賞せり。モンテマルダはクリストフォロ・コロomboの青年像によりて名を得、『フランクリンの天才』と題する作にて名手の地を占め、終に『エネル・ケンプロリ・ネステ・デル・ヴェオロスル・フィリ』(Jenner Che Prova L'Innesto del Vajuolo sul Figlio) を作るに至りて寫真彫刻の大家と稱せらる。千八百六十一年内國博覽會の開設ありて美術大に進歩し遂に今日の盛況を見るに至れり。然れども茲に其詳を論ずるに遑わらず暫く著名なる作者を列擧して已まん。ピエモンテ山水畫家にはアントニオ・フォンタナシ (A. Fontana)・アンゼロ・ベッカリア (A. Beccaria)・カルロ・ピタラ (Carlo Pittara)・トリココサラ (D. Coscia)。現存にはバルトロメオ・ジュリアノ (千八百二十五年生)・ロレンゾ・デ・レアーニ (千八百四十年生)・マルコ・カルデリニ (千八百五十年生)・風俗畫家にはジブニ・パッチスタ・クアドロチ (G. B. Quadroni)・千八百四十四年生、千八百九十八年歿を推す可く、彫刻にはオドアルド・タバッキ (Odoardo Tabacchi)・レオナルド・リストルフィ (L. Ristolfi)・千八百五十九年生等なり。次に戦争を描くに妙を得しは嘗てガリバルチに彈煙燻雨の間に従ひしピエモンテのエレウテリヨ・パリアノ (Eleuterio Pagliano) あり。又

ジュゼッペ・ベルチニ(千八百二十年生千八百九十八年歿)の門下多く秀才を出す。エチチアが埃國の羈絆を脱するや、其地に出で、半島の畫界に一新派を開きしはジコモ・フヅレット(G. Fuzetto)。千八百四十九年生千八百八十七年歿にて、エチチアが王國中美術の中樞と爲りしは、千八百九十五年府長リカルド・セルワチコ(Ricardo Selvatico)が初めて美術展覽會を開き、次で千八百九十七年其第二回を開きしに由れり。リグリアの畫界にはニコロ・バラビノ(Nicolo Barabino)。千八百三十一年生千八百九十一年歿、エミリアの美術界にはアダオダト・マラテスタ(Adodato Malatesta)。千八百六年生千八百九十一年歿、ジヴンニ・ムッチェリ(Gio. Muzioli)。千八百五十四年生千八百九十四年歿、ツスカナにてはステファノ・ユッシ(Stefano Yessi)。千八百二十二年生、ジヴニ・ラトリ(Gio. Fattori)。千八百二十八年生、テレマコ・シニョリニ(Telemaco Signorini)。千八百三十五年生等あり。羅馬にはチサレンフラカッシニ(千八百三十九年生千八百六十八年歿)、ブランチェスコ・ボデスチ(千八百年生千八百九十五年歿)、彫刻にはエルコレ・ロサ(Ercole Rosa)。千八百四十六年生千八百九十三年歿あり。ナポリにはフランチェスコ・サエリ、アルタムラ(F. Saverio Altamura)。千八百二十六年生千八百九十七

年歿、アキルレ・エルツンニ(Achille Vertunni)。千八百二十六年生千八百九十七年歿、ジッセルム・ニッチメ(Giu. de Nittis)。千八百四十一年生千八百八十四年歿、フランチェスコ・ネチ(Fran. Netti)。千八百三十二年生千八百九十四年歿あり。シチリア島の畫家にて最も高名なるはジッセルム・シチ(Chu. Scint)。千八百三十六年生なり。此他諸方現存の名匠多しと雖も、多く省略に付す。唯最後に尙若干の氏名沒了し難きものは、樂界の妙手なり。

抑伊太利亞美術の精華として誇るに耐ゆるは其樂部なり。ジッセルム・エルヂ(Giu. Verdi)は千八百十三年ブッセトに生れ、千八百四十二年『ナブッコ』(Nabucco)の曲を以て先世を驚かし、爾後『エルナニ』(Ernani)。千八百四十四年『舞踏』(Rigoletto)。千八百五十二年『発見者』(Il Trovatore)。千八百五十三年『彷徨』(La Traviata)(全年)『メイズ』(Aida)(千八百七十一年)『オテロ』(Otello)(千八百八十七年等)の諸作ありて、過ぎし半世紀間樂界に獨歩せり。此外に於てはアミルカン・ボンキエリ(Amilcare Ponchielli)。千八百三十四年生千八百八十六年歿の作『喜悅』(Gioconda)アリゴ・ボイト(Arrigo Boito)。千八百四十二年生)の『メフィストフェル』(Mefistofele)の二曲最も取る可きなり。若し夫れ晩近

の諸作家にはジッコモンブチニ (Giacomo Puccini) 千八百五十八年生、ビエトロ・マッサーニ (P. Mascagni) 千八百六十三年生、ルジエロ・レオンカヴァロ (Ruggiero Leoncavallo) 千八百五十三年生、アルベルト・フランケッチ (千八百六十年生)、ウムベルト・ジュールダノ (Umberto Giordano) 千八百七十年生、又聖樂にはロレンツ・ベロッシ (Lorenzo Perosi) 千八百七十二年生あり。

文學美術のみならず、今日の伊太利亞はまた若干の科學者あり。一二の例を擧ぐれば、グラチア・ヂュ・アスコリ (Gratiano Ascoli) 千八百二十九年生、の言語學に於ける、ロベルト・アルヂゴ (Robert Ardigò) 千八百二十八年生の哲學に於ける、フランチェスコ・フェラ、(千八百十年生)、ゼロラモ・ボッカルド (Gerolamo Bocardo) 千八百二十九年生の經濟學有名なる、チエサレ・ロム・ブロン (千八百三十六年生)、の刑法學、アンヂェロ・マッソ (千八百四十六年生)、の生理學、スタニスラス・カンニツォ (Stanislas Cannizzaro) 千八百二十年生の化學、ルイジ・クレモナ (千八百三十年生)、エウゼビオ・ベルトラミ (千八百三十五年) 生の數學、ガリレオ・フェラリス (千八百四十七年生)、九十七年歿の電氣學、さてはジョヴァニ・シヤンレリ (Giov. Schiaparelli) 千八百三十五年生の天文學に通ぜるが如き是なり。

以上列擧するところ、殆んど學者、美術家の紀名簿の一片に過ぎず。然れども以て、輒近伊太利亞學界、美術界の趨向如何を推擲せんに足らむ歟。其詳節細叙に至りては本史の本色に非ず、且節叙の餘地莫し、而も別に自ら其書のある在り。聊か以て結尾に代ふる耳。

伊太利亞史終

明治三十六年三月十五日印刷
明治三十六年三月十八日發行

定價金壹圓貳拾五錢

譯者 坂本健一

發行者 荒川信賢
東京市小石川區關口町二百番地

印刷者 熊田宜遜
東京市神田區錦町三丁目廿五番地

印刷所 熊田活版所
東京市神田區錦町三丁目廿五番地



發行所

東京府豊多摩郡戸塚村六百四十七番地

早稻田大學出版部

電話番町三百七十四番

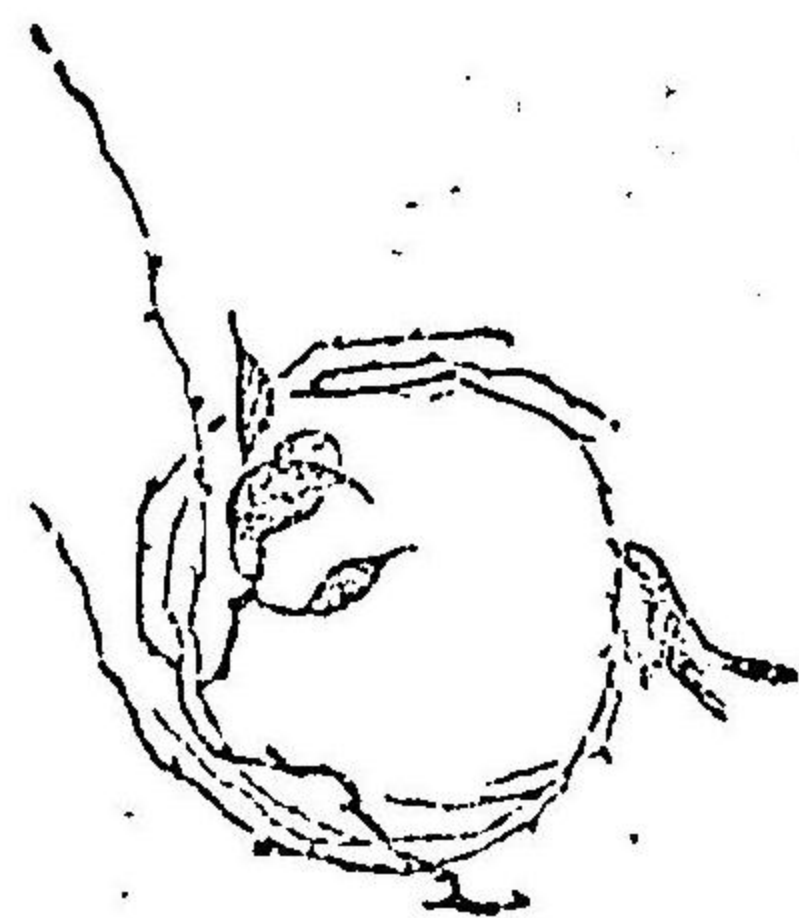
近刊

- 法學博士相田正三郎 岸田虎三郎
コンラード氏經濟學
(上)國民經濟學 (中)經濟政策學
(下)財政學
法學博士松崎茂之助 岩城之實
ハドレー氏經濟學
文學士梅吉誠太郎 植原正直共譯
アダムス氏財政學
法學博士天野爲之助 原田駒之助譯
クレアー氏外國爲替論
法學士 永井直好譯
パッテン氏消費論
法學士 柳田岡男譯
クラーク氏分配論
文學士 杉江輔人譯
クレーン氏交通機關論

マスター、オヴ、アーツ千葉鐵道
英國 價値論
譯者未定

ボン、パワーク氏資本論
譯者未定

デヴィッドソン氏貨銀論



獨逸民法論

法學博士相田和夫 法學博士植原正直
法學博士岸田正三郎 法學博士岸田虎三郎
帝國大學教授 レーノホルム 評
法學博士梅吉誠太郎 法學博士岩城之實
法學博士松崎茂之助 法學博士天野爲之助
法學博士中村龍彦 法學博士古川五郎合譯
法學博士相田正三郎 法學博士山田弘一
附獨逸民法正文 正價金八圓
菊物三千五百餘頁普及金文字入上製
第一卷 總則 第二卷 物權
第三卷 債權 第四卷 親族、相続
◎正價◎第一卷金壹圓七拾五錢◎第二卷金壹圓七拾五錢◎第三卷金貳圓貳拾五錢◎第四卷金貳圓貳拾五錢◎郵送料◎第一卷金拾八錢◎第二卷金拾六錢◎第三卷金拾八錢◎第四卷金拾六錢◎全部小包料壹頁

本書は有名なる獨逸の民法學者デルンブルヒ氏の著パンテクテンにして約三千五百餘頁の大空近世民法の一般原則を闡明して餘蘊なし本校專門の諸學士を煩すこと多年漸く完成出版するに至れり世間有爲の士幸に一本を座右に供して本書の眞價を判せられよ

獨逸商法論

冊二全

附獨逸商法正文

獨逸手二百餘頁普及金文字入上製美本
正價金壹圓五拾錢小包料四頁
原著者は獨逸法學界に於て名譽噴々たる斯學の大家にして此書は即ち其一代の大傑作なり最新の法理に據り縱横無盡今世商法の一般原則を説明して其の遺蹟ありテ思ふに我輩商法は多く其基を獨逸に採れるを以て本書の如きは其法理を研究せんとする者の爲めに必要無類の參考書たるべし

獨逸刑法論

刊近

著者が世界に於ける斯學の本師として崇敬すべき學者たるは普く識者の公認する所而かも本書は氏が畢世の大著述にして我國は勿論歐米の學者苟くも刑法の事を論ずる者殆んど引證を此書に採らざるは稀なり、本校風に此書の世を益するの大なるべきを思ひ岡田博士及び乾學士等を煩すこと多年、辛苦功成つて今や漸く上梓發行するの運となれり

近刊

- 獨逸ヘフタル 法學士相田九方一譯
- 國際公法
- 獨逸パル著 法學士古川五郎譯
- 國際私法

佛國フィオレリ著 法學士宮本平九郎譯

國際私法

獨逸レーマン著

法學士古川五郎
法學士玉川次致共譯

手形法論

法學士小山温法學士鈴木三郎共著

民法要論

法學士 青山衆司著

商法要論

法學士 朝倉外茂著

海商法



法學士 林田瑞太郎著

改正案議 選舉法釋義

紙數四百餘頁 洋製美本
正價金八十錢 郵稅金八錢

冊一全

法學博士 岡田朝太郎律師
藤澤茂十郎著

改正案 刑法評論

紙數三百頁 洋製美本
正價金五十錢 郵稅金六錢

冊一全

刑法改正案參考書

正價金三十錢 郵稅金四錢

冊一全

法學士古川五郎、山口弘一合譯

獨逸新民法正文

紙數五百頁 洋製美本
正價金四十四錢 郵稅金四錢

冊一全

新法典正文

冊二全

民法之部 法例、民法、民事訴訟法、
商法、外三法全二冊 正價四十五錢 郵稅八錢

商法之部

商標法、商法、
正價廿八錢 郵稅八錢

(版三)

法典修正案理由書

冊二全

刑罰法、民法、
正價各金七十五錢 郵稅各十四錢



定期刊行雜誌

中等教育會 發行

中等教育

一月一回

定(一)部郵稅共金廿五錢 五部
價(十五部)全部金三十四錢三十錢

早稻田學會 發行

早稻田學報

一月一回

定(一)部金十五錢 六部金八十五錢
價(郵稅)一部一錢 四六十五錢

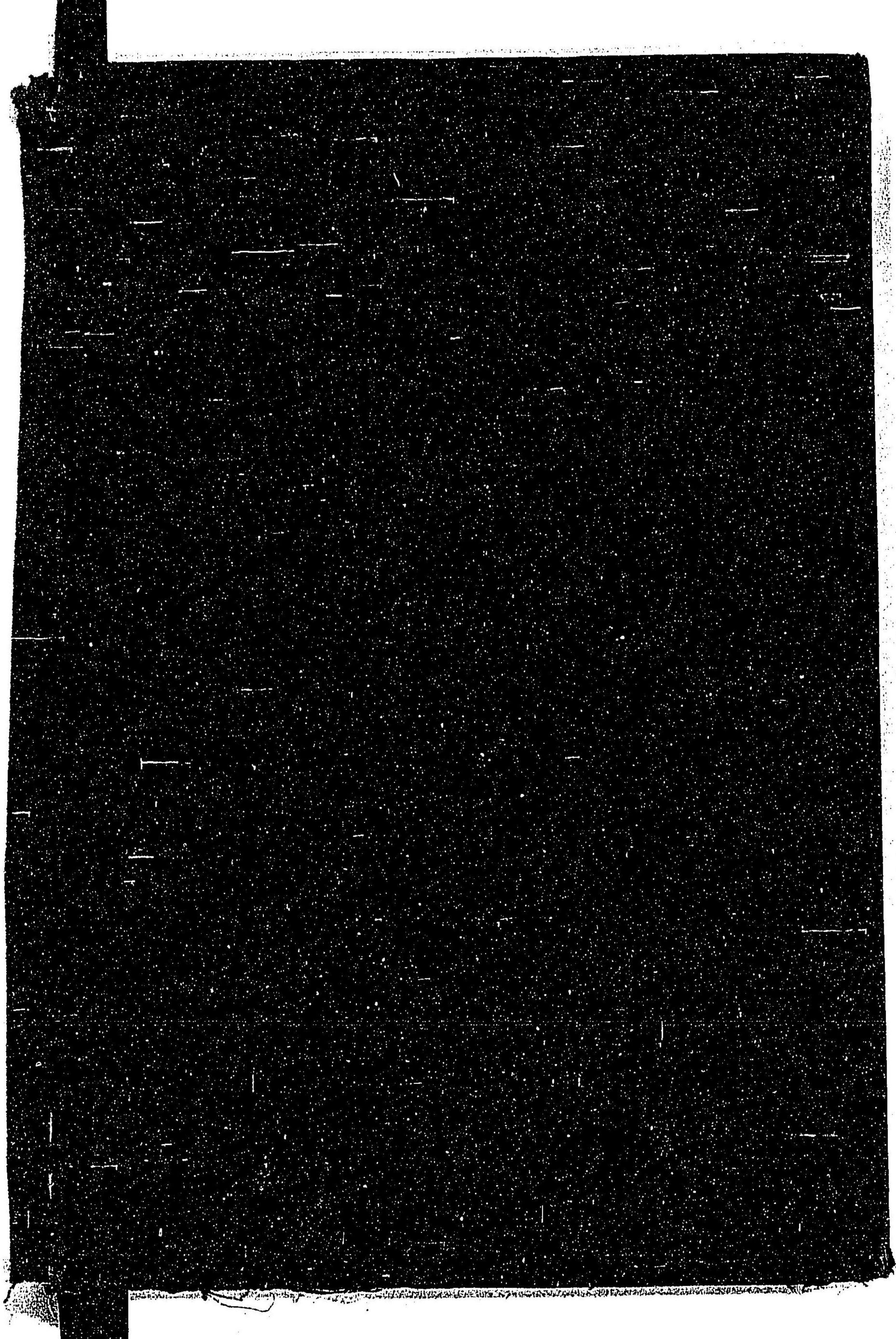
外交時報社 發行

外交時報

一月一回

定(一)部金十錢 六部金六十錢
價(十二部)全部金四十七錢

90
60



90
60

Ⓜ

003500-000-9

90-60

伊太利亞史 (歷史叢書)

坂本 健一 / 編

M36

ACD-0012

